

Vol. 67
2026 SUMMER

INDEX

【繋ぐ】

愛でる Special Issue:

庶民の暮らしが息づく文様 「紋切り」の伝統美

PAPER TOPICS

紙好きたちを惹きつける
透明な薄紙

深める

木くずで環境価値を創出する
「KPPエコワークス」のリサイクル事業

愛でる P01

庶民の暮らしが息づく文様
「紋切り」の伝統美

PAPER TOPICS P07

紙好きたちを惹きつける
透明な薄紙

深める P09

木くずで環境価値を創出する
「KPPエコワークス」のリサイクル事業

伝える P11

最期を見据える旧友から届いた
切なる思いがにじむ葉書

拓く P13

屋外向けペーパーターフ®を本格展開／
仙台七夕飾りの展示イベントを開催

紐解く P15

祈りを灯し、揺らめきを宿す
和紙の佇まい「灯籠」

作る 付録

下中菜穂さん監修
福を呼び寄せる「紋切り遊び」

庶民の暮らしが息づく文様 「紋切り」の伝統美

一枚の紙を折り、型に沿って刃を入れ、そっと開く。手のひらにふわりと立ち上がる文様は、江戸の寺子屋で子どもたちが胸を躍らせた瞬間と、今も変わらず響き合います。江戸時代から親しまれてきたこの「紋切り遊び」を通して、日本で育まれた文様の魅力や江戸の町人文化、その時代を生きた人々の価値観を現代に橋渡しているのが、造形作家・下中菜穂さんです。「紋切り遊び」を入口に、人と文化の営みを探究し続ける下中さんのインタビューを通して、人々の暮らしと深く結びついた紙の魅力に迫ります。

「手の中に生まれる文様が、時代を超えて人をつなぐ」

日本人が育んだ

創造性豊かな文様

紙を折り、型に沿って切り込みを入れてそと開くと、一枚の紙の中から美しい文様が現れる。ただの小さく折り畳まれた紙切れが、指で開いていくにつれて、精巧な職人技のような文様へと姿を変える驚きと感動は、アナログな遊びだからこそ味わえる手触りと思いがけない発見の楽しさがあります。下中葉穂さんは、江戸時代に庶民の間で流行したもの、時代の波に埋もれてしまっていた日本の伝統的な切り紙遊び「紋切り遊び」の魅力を掘り起こし、現代へと伝える活動を続けています。

「紋切り遊び」は日本の家紋文化と江戸時代の庶民の創造性が結びついて発展したものです。図案となる家紋は、平安時代に貴族たちが牛車や調度品に目印として用いた文様がはじまりとされ、その後、武士階級へと広がりました。戦国時代には戦場で敵味方を識別するための印となり、江戸時代になると庶民の暮らしにも浸透していきます。桜や梅、桔梗などの植物をはじめ、鶴や蝶などの生き物、波や雪といった自然現象、さらには扇や車輪などの道具まで、あらゆるものが家紋のモチーフとなりました。「家紋つて堅苦しいイメージがありますよね。でも実際に調べてみると、本当に自由なんですよ」。そう話す下中さんの言葉どおり、日本の伝統的な文様には、思わず笑ってしまうよう

なユーモラスな意匠も数多く存在します。さらに興味深いのは、文様が単なる装飾ではなかったことです。「たとえば『抱き茗荷』『入れ違い茗荷』※といった家紋の名前。モチーフは同じでも配置が異なり、その名を聞くだけで形が想像できるようになっています。昔の人は文様を言葉みたいに使っていたんです」（下中さん）。日本の文様は、複雑な造形を、極限までシンプルな線と円だけで抽象化したグラフィックデザインです。そのミニマリズムな美しさを競うだけでなく、人々の感覚や価値観を共有するための

「ことば」でもあったのです。

※「抱き茗荷（だきみょうが）……向かい合う茗荷を抱き合わせた図。冥加信仰を映す代表的な茗荷紋。
「入れ違い茗荷（いれちがひみょうが）……茗荷を上下に交差させ円形にまとめた意匠。構成的な美が際立つ。」



抱き茗荷 入れ違い茗荷

一冊の古書から始まった 下中さんの研究活動

下中さんと紋切り遊びとの出会いは今から約25年前のこと。図書館で偶然見つけた明治時代の遊びを紹介する本の中に「紋切り遊び」という聞き慣れない言葉があったそうです。「日常の中で、ステレオタイプや思考停止を意味する言葉として『紋切り型』って使いますよね。あまりよろしくない表現だけど、そもそもその語源になった『紋切り』って何だろう？という素朴な疑問が湧いたんです」と下中さん。その時に手にしたのは、明治時代に出版された

『世界遊戯法大全』という本の復刻版。西洋から入ってきたばかりのトランプや卓球、さらには数学の計算式までもが「遊び」として紹介されているその古い書籍の中に、江戸から続く「紋切り遊び」の手法がひっそりと掲載されていたのです。「これはいついたいなんだろうと思って、自分で実際にやってみたんです。それがすべての始まりでした」。

「紋切り遊び」の基本はきわめてシンプルです。和紙などの薄い紙を二つ折り、三つ折り、あるいは五つ折りといった決まった形に折り畳み、そこに描かれた型の通りにハサミやカッターで切り抜いて、最後にそとと開きます。ただそれだけの行為によつて、驚くほど美しく幾何学的な「文様」が手の中から現れるのです。「子どもの頃、適当に紙を切つて開くだけでもワクワクしましたよね。でも紋切りが決定的に違うのは、長い時間をかけて精選されてきた伝統的な『型（紋切り型）』の通りに切るとい点です」。

できあがった精緻な文様の美しさに衝撃を受けた下中さんは、東京神田の古本屋などを巡り、江戸から明治、昭和初期に至るまでの古い「紋帳（もんちょう）」や意匠図案集といった資料を集め、独学で研究を深めていきました。「調べれば調べるほど、わからないことが増えるんです」と笑う下中さん。植物や動物、あるいはユーモラスな生活雑器までもモチーフにした新奇で奥深い文様の世界に、下中さんは心地よくのめり込んでいったのです。



大正時代に出版された学童向け工作書。切り紙や折り紙を通じて子どもたちの創造力を育む内容で、当時の暮らしの中に紙遊びが根付いていたことがわかる。



江戸から明治時代にかけて作られた古書。和紙と墨で作られた古い書物は驚くほど丈夫で、かつては火事の際に井戸へ沈めて守ったという話も残っている。



1907(明治40)年に発行された、古今東西のさまざまな遊びやルールを紹介した書籍。下中さんが図書館で手にしたのは、1984年発行の復刻版。



破れないようにゆっくりと開くと、美しい家紋や文様が姿を現す



型紙のラインに合わせて、ハサミやカッターで慎重に切り抜く



薄手の和紙など、正方形の紙を規定の手順で折りたたむ（三つ折り・五つ折りなど）

紋切り遊びの 基本的な流れ

文様の先に見えてきた

人々の暮らしと紙文化

江戸時代後期、庶民の知的好奇心や遊び心が最高潮に達していた時代、家紋などの文様は単なるデザインではなく、「一種の「言葉」としてコミュニケーションの道具に使われていました。人々は共通のリテラシーを持ち、役者の衣装の柄や、言葉遊びと掛け合わせた文様を見ては、小粋に笑い合っていたのです。「文様について探究していくと、必ず人々の暮らしに行き着くんです。文様は誰かが考え、使い、受け継いできたものです。その背景には、その時代を生きた人々の価値観や生活があるので、興味が尽きることはありませんね」（下中さん）。そんな下中さんの関心は、海外に向けられたことも。その一例が、中国の農村に残る切り紙文化との出会いでした。その地域では、毎年お正月に障子を張り替え、その上に「窓花」と呼ばれる赤い切り紙を貼り、一年かけて色褪せていく姿とともに時の流れを体感する文化がまだ息づいていました。「農村のおばさんに、切り紙が綺麗だから持って帰りたい」とお願いすると、「なぜ持って帰ろうとするの？これは一年かけて朽ちていくもの。そしてまた自分たちの手で作ることに意味があるんだよ」と言われたんです。儚くてすぐ壊れるものだからこそ、技術が繰り返し継承されていく。その価値観に大きな衝撃を受けました」と下中さん。切り紙を作品として飾るのではなく、生活の中で当たり前に使われる紙の文化。人々の暮らしの中から生まれた創造性は、日々の営みとともに磨かれ、今も静かに息づいているのです。

「気づき」の瞬間を「一番大切にしています」と下中さんは話します。

実際のワークショップで、最初は型通りに作っていた参加者も、時間の経過とともに「ここを少し変えて切ってみたらどうなるだろう」と、自ら型をはみ出し始める。そのプロセスこそが「型破り」の語源そのものであり、現代の教育や表現において最も見失われがちな「心が震えるものづくりの原点」なだと下中さんは考えているそうです。「型があるから型破りができるんです。長い年月をかけて磨かれてきた型の美しさを知るからこそ、自分なりの表現へと踏み出せる。それは創造の本質であり、学びの本質でもあります。個性を出しなさいと言われても難しい。でも夢中になって続けているうちに、その人らしさは自然ににじみ出てくるんじゃないかと思っています」（下中さん）。

ワークショップに使う道具は、ハサミやカッター、そして美しい色彩の和紙のみという極めてシンプルなもの。下中さんは、埼玉県比企郡小川町周辺で生産されている「小川和紙」を使用しています。「手漉きよりも繊維が引つかりにくく、カッターの刃が通りやすい機械漉きの和紙を長年愛用しています。手触りがよく美しい素材だからこそ、できたものを大切にしようとする気持ちが生まれるんじゃないかと思います」と下中さんは微笑みます。

本物の体験だけが

人の心に残り続ける

近年、生成AIをはじめとするデジタル技術が急速に進歩し、苦勞して調べたり手を動かし

暮らしの中で生きる切り紙の持つ力は、日本国内でも証明されることとなります。2011年の東日本大震災の後、下中さんは南三陸町の仮設住宅へ和紙と紋切りを持って通いました。被災した人々は、夢中で手を動かして型を切り、できあがった切り紙をお世話になった宅配便のドライバーや周囲の人々へお礼として手渡すなど、コミュニケーションの道具として使ってくれたそうです。また、その地には、毎年年末に宮司が白い切り紙（御幣や神棚飾り）を切り、氏子たちがそれを神棚に飾って一年の神様の力の移り変わりを視覚的に体感するという、中国の農村と同じ地続きの文化が残っていました。

「どんなに大変な状況にあっても、「きりこ」と呼ばれる真っ白な切り紙が新しく飾られることで、また新しい一年が来るという心の支えになる。今の世の中でも、切り紙が本物の力を発揮している現場があることを、驚きとともに学ば

せてもらいました」と下中さん。暮らしの中で息づく紙文化。紙は単なる素材ではなく、人と人を結びつける媒体であることを改めて実感したそうです。

型があるからこそ、

「型破り」が生まれる

現在、下中さんは全国各地で紋切り遊びのワークショップを開催しています。そこで大切にしているのは「教えすぎないこと」。単に作り方を懇切丁寧に解説するのではなく、参加者自身が手を動かし、試行錯誤する「余白」をあえて残すことにあります。「昔の本は全然親切じゃなくて、絵が描いてあるだけで折り方も書いていない。だけど、だからこそ自分で考える余地があり、「あ、そういうことだったか！」と自分で発見する楽しさがあるんです。親切すぎる余計なお世話をしないこと。ワークショップでも、その



中国の農村部で受け継がれる切り紙文化「窓花」。正月や祝いの際に窓へ飾り、暮らしの中で幸福や豊穡への願いを表現する伝統的な装飾として伝承されている。

宮城県南三陸町に伝わる神棚飾り用の切り紙「きりこ」。新しい年を迎えるための折りの象徴であり、毎年新しいものに取り替えることで、人々は神様の力の移り変わりや季節の巡りを実感する。

たりせずとも、瞬時に「答え」に辿り着ける時代になりました。しかし下中さんは、その利便性の陰で人間が本質的な何かを手放しつつあるのではないかと、警鐘を鳴らします。

「腑に落ちる。つまり自分の血や肉になる感覚というのはどんなにささやかなことであつても、自分の手や体を通した体験からしかスタートしませんが、紙という素材は、失敗しても「切れちゃったら貼りましょう」と言える、人間の手出しを許してくれる存在です。AIがどれほど優れた情報を与えてくれても、自分で手を動かして『できた！』と胸をときめかせた瞬間の感覚だけは、人間の心に残り続けるんじゃないかと思うんです」（下中さん）。

下中さんがこれまでに復元・考案した紋切りの型は、今や500を超えています。年齢や国籍を問わず、3歳の子どもから80代のお年寄りまでが同じテーブルを囲み、お互いの作った紋切

りを見つめて「いいね」「かっこいいね」と心から称え合う。そこには、効率や論理だけで割り切ることでできない、人間らしい豊かな時間と場の力が満ち溢れています。「先人が遺してくれた素晴らしい型の文化に、私たちは下駄を履かせてもらっているようなものです。言い換えれば、歴史という大きなつながりの中で遊ばせてもらっているわけです。このささやかな手作業から始まるウロウロとした道草の楽しさを、これからもたくさんの人たちと共有していきたいですね。紋切り遊びには、何百年もの時間の重なりと、人間の泥臭くも愛おしい知恵が、今も確かに息づいています。

紋切りを暮らしに呼び込む

切り抜いた紋をただ眺めるだけでなく、暮らしの中で使ってみましょう。七夕の飾りにしたり、うちわに貼ったり、吊るしてモバイルにするなどして、季節を楽しんでください。

今回の付録は下中菜穂さん制作・監修の「紋切り遊び」をお楽しみいただけます！

PROFILE

しもなかなほ
下中菜穂さん

造形作家。千葉県生まれ。江戸時代の紙遊び「紋切り」をきっかけに文様文化の探究を始める。書籍『紋切り型』シリーズの出版をはじめ、国内外でワークショップや展覧会を開催。紙文化や民俗文化の調査・発信にも取り組んでいる。旧暦の日取りで行事をやってみる「旧暦カフェ」を主宰。昭和のくらし博物館副館長、アンデルセンこども美術館（船橋市）切り紙展審査委員長。

<https://www.xpl.jp/> （エクスプランテ／鳥有苑）
<https://explantae.theshop.jp/> （オンラインストア）



「紋切り型 風之巻」
（エクスプランテ）

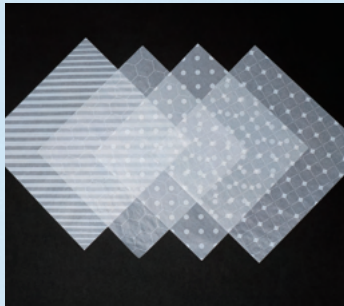


『こども文様のものがたり』（平凡社）

「紙好き」を惹きつけるグラシンペーパーの魅力

光をやさしく通す半透明感

グラシンペーパーの魅力は、紙でありながら光をやわらかく透過する半透明性にあります。中身をほのかに見せる上品な透け感は、包装や文具に特別な存在感を付加。重ねることで生まれる陰影や奥行きも、この紙ならではの表現です。



シャカシャカとした軽やかな触感

指先に伝わるシャカシャカとした独特の質感も、グラシンペーパーならではの魅力です。一般的な紙とは異なる軽やかな触感は、思わず何度も触れたくなるほど。視覚だけでなく、触覚でも楽しめる紙であることも、人気の理由なのです。



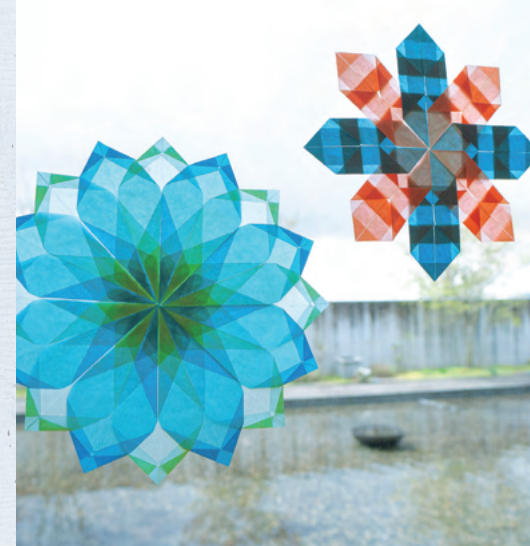
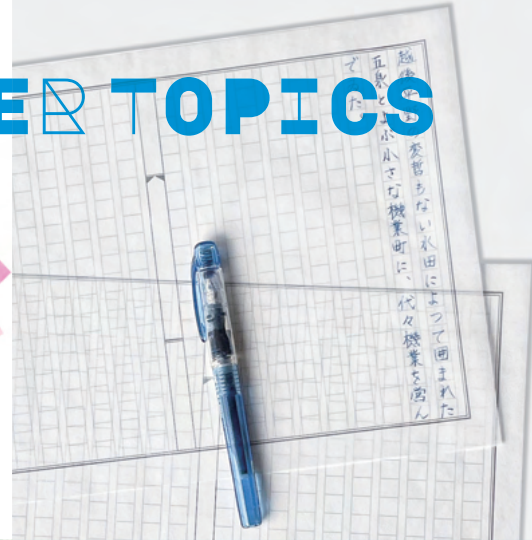
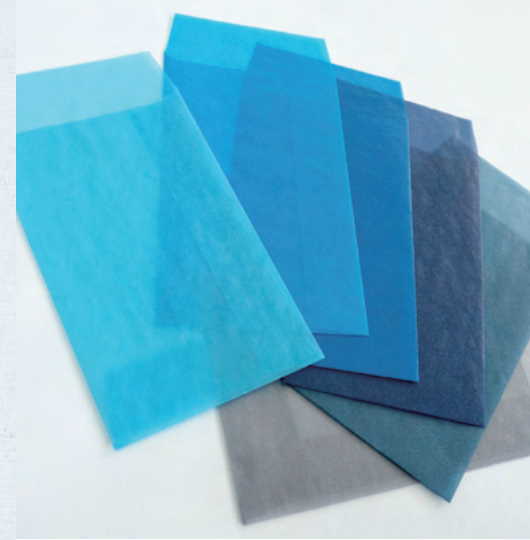
多彩な色彩が生み出す表現力

吉田印刷所では、高度な印刷技術を活かしてグラシンペーパーに多彩な色彩を表現しています。鮮やかな単色から繊細なグラデーションまで、印刷ならではの豊かな表現が可能。透け感と色彩が重なり合い、独特の美しさを生み出します。



クラフトの創作意欲を刺激

折り紙や切り絵、コラージュ、ラッピング、手帳デコレーションなど、グラシンペーパーの使い方は自由自在。透け感や色彩を活かしてアイデアを形にできるため、多くの紙好きや文具好きにとって創作意欲を刺激する素材となっています。



商品の魅力を引き立てるツールとして 企業ブランドの価値向上に貢献

BtoB
向け

半透明の美しい質感に企業ロゴやデザインを印刷することで、箱を開けた瞬間からブランドの世界観を感じさせる演出が可能に。吉田印刷所のグラシンペーパーは企業価値を高めるツールとしてさまざまな業界・企業から注目されています。



実践的な楽しみ方を提案する ECサイト「そ・か・な」

BtoC
向け

一般向けECサイト「そ・か・な」では商品の購入だけでなく、グラシンペーパーを使ったラッピングやクラフトのアイデアや、アート作品づくりのヒントも発信。紙の新たな魅力や楽しみ方と出会える、グラシンペーパーの世界への入口となっています。



ECサイト「そ・か・な」
<https://sokana.shop>



紙好きたちを惹きつける透明な薄紙

半透明の透け感と、シャカシャカとした独特の手触り。グラシンペーパーは、もともと菓子の包装紙や薬包紙、レコードの内袋など、私たちの暮らしの身近な場所で使われてきた紙です。しかし近年、この紙をペーパークラフトなど、自分らしくアレンジして楽しむ人が増え、新たな注目を集めています。

その中心にいるのは、紙好きや文具好きの人たち。手帳やノートのデコレーション、コラージュ、ラッピング、カードづくりなど、グラシンペーパーの楽しみ方は実にさまざま。光をやさしく通す透け感や、紙を重ねることで生まれる奥行きのある表現は、他の紙にはない魅力として多くのファンを惹きつけています。

こうした楽しみ方を支えているのが、吉田印刷所が展開するグラシンペーパーです。同社では、当初はグラシンペーパーの商品化をめざしていたわけではなかったそうです。「印刷技術が高める中で、どこまで薄い紙に印刷できるかを挑戦していく過程で出会ったのがグラシンペーパーでした」と話すのは、同社の小川さん。

オフセット印刷に欠かせない水の管理技術を磨く中で、極薄紙への印刷ノウハウを蓄積し、その可能性を追求してきたのだそうです。

そうした技術的な挑戦をきっかけに生まれたのが、一般消費者向けブランド「そ・か・な」です。ECサイトでは、クラフト素材として使えるベーシックなグラシンペーパーから、数百種類にも及ぶパターン豊富なデザインペーパーまで幅広く展開。さらに、紙の透け感を簡単に楽しめる封筒セットやメモ帳、手帳などのステーションナリー、リボンやギフトパッケージなどのラッピングアイテムも徐々に充実させてきたそうです。

商品開発の原動力になっているのは、ユーザーとの対話です。「例えば『文具女子博』や『紙博』といった紙好きな人向けのイベントに出展すると、お客さまから直接『こんなものが欲しい』という声をいただけます。その声をもとに商品を改良したり、新しい商品を企画したりしています」とのこと。実際にイベント会場で寄せられたリクエストから生まれた商品も少なくないそうです。

近年では同社のECサイト「そ・か・な」で購入した商品を活かして手帳やノートを彩ったり、しおりや封筒を手づくりしたり、贈り物のラッピングやメッセージカードに取り入れたり、日々の暮らしの中で自由なアレンジを楽しむ人が増えています。デザインペーパーでオリジナルのポチ袋をつくりお祝いの際に配ったりと、使い方はさらに広がり、InstagramをはじめとするSNSには創意工夫に満ちた作品が次々と投稿されています。そこにはグラシンペーパーが持つ新たな世界観を見ることができま

す。「グラシンペーパーには、まだまだ活かしきれていない魅力があります」（小川さん）。極薄紙ならではの透け感や手触り、そして印刷によって生まれる豊かな表現力は、使い手のアイデア次第で無限の可能性を秘めています。暮らしの中の小さな工夫から生まれる楽しみ方が、グラシンペーパーの新たな価値をこれからも広げていくはずです。

会社情報

株式会社吉田印刷所

【本社】
住所：新潟県五泉市今泉947-1
TEL：0250-43-0141
【東京オフィス】
住所：東京都中央区東日本橋2丁目25-6 シェルブリーズビル4F
TEL：03-5942-8975
<https://www.ddc.co.jp>



Information

「文具女子博 pop-up in 新潟2026」

会 期：8月19日(水)～8月23日(日)
会 場：新潟伊勢丹 6階 催物場
(新潟市中央区八千代1-6-1)
入場料：8月19日(水)・20日(木)・21日(金)…890円
8月22日(土)・23日(日)…990円
※ともに日時指定制。 ※前売入場チケットのご購入が必要です。
<https://bungujoshi.com/event/pop-up-in-niigata2026/>



木くず資源化のプロセス

バーチャル工場見学

https://kppcoworks.co.jp/office/vr_recyclingcenter/



KPPエコワークスの処理フロー



剪定枝



家屋解体材



木製パレット



製材端材



型枠材

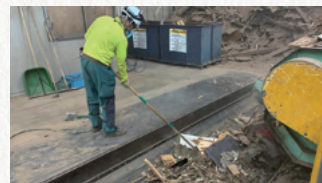


その他木くず



①受け入れ・計量

木くず(家屋解体材、木製パレット、剪定枝など)を積んだトラックが工場に到着。台貫(大型の計量器)で重量を測り、荷降ろしを行う。



②展開検査(異物除去)

木くずを受け入れヤードに搬入した後、混入してしまった異物を除去。



③破碎処理

ハンマー式の破碎機により、木くずを細かく破碎処理する。



④篩機による選別および磁選

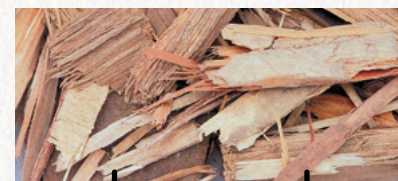
専用の篩機にかけて規格外サイズのチップを選別し、再度破碎工程に戻すことで最終製品のサイズを規格内に揃える。さらに磁選機で金属を除去し、金属検知器で残留金属を確認して混入防止を図る。



⑤保管・出荷

高品質な木質チップとして生まれ変わった製品を工場内にストックし、チップ運搬車(専用の大型トラック)などに積み込んで、バイオマス発電所や製紙工場、建材工場などへ出荷する。

サーマル用チップ



発電所

ボイラー施設

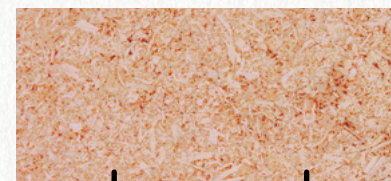
マテリアル用チップ



製紙会社

建材工場

ふるいした篩下チップ



セメント製品メーカー

園芸資材メーカー



“木くず”を再び価値ある資源へ。
「KPPエコワークス」のリサイクル事業をご紹介します

2026年3月、KPPグループはシナネンホールディングス株式会社よりシナネンエコワーク株式会社の全株式を取得し、新たに「KPPエコワークス株式会社」をグループに迎えました。KPPエコワークスは、木くずのリサイクル事業やリサイクル燃料・原料の供給事業を展開しており、紙の販売・回収・リサイクルを中心に資源循環に取り組んできたKPPグループにとって、その事業領域をさらに広げる重要な役割を担っています。木くずのリサイクル施設(中間処理施設)をグループ内に有することで、資源を有効活用する仕組みをより一層強化し、循環型社会の実現に向けた取り組みを加速させます。

KPPエコワークスは、千葉と埼玉にリサイクルセンターを構え、木くずの再資源化に取り組んでいます。両センターでは年間7万トンを超える木くずを取り扱っており、首都圏の木造住宅の解体で発生する木材量を目安にすると、年間でおおよそ1万5千棟に相当する規模です。

両施設は、木くずの受け入れから処理、保管までのすべての工程を屋内で行う完全屋内型施設です。騒音や粉塵の抑制、防災対策など、周辺環境への配慮を徹底するとともに、安全で効率的な作業環境の整備にも力を注いでいます。また、交通アクセスに優れた立地を活かし、幅広い地域から発生する木くずの受け入れを可能にしています。

建設現場や解体現場、物流拠点などから発生する木くずは、KPPエコワークスの高度な再資源化技術によって、製紙原料やバイオマス発電の燃料など、新たな価値を持つ資源へと生まれ変わります。こうした取り組みは、限りある資源を有効活用し、私たちの暮らしを支える循環の輪を広げるものです。KPPグループは、新たな仲間となったKPPエコワークスとともに、その知見を最大限に活かし、持続可能な社会の実現に向けて歩みを進めていきます。



KPPエコワークス株式会社
KPP ECOWORKS CO.,LTD.

住所 : [本社] 東京都中央区明石町6番24号
[広域営業オフィス] 千葉県松戸市本町18番地の4
NBF松戸ビル8階

事業内容 : 産業廃棄物処分量 / 一般廃棄物処分量 /
産業廃棄物処理サポート事業

HP : <https://www.kppcoworks.co.jp/>

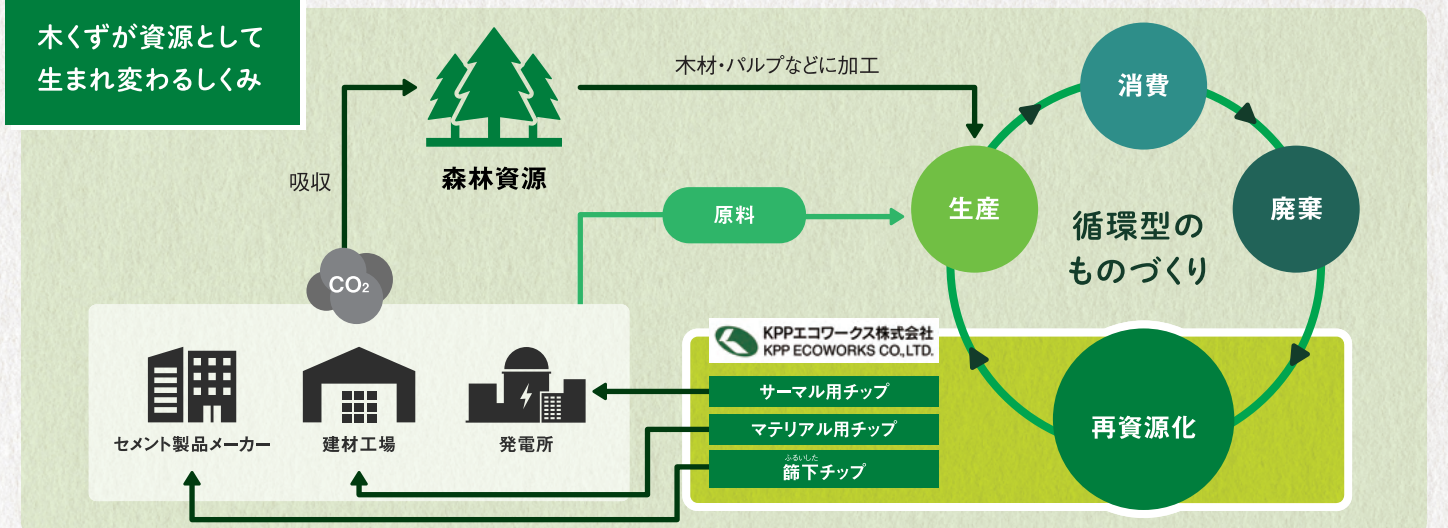


千葉リサイクルセンター(千葉県千葉市美浜区新港223-9)
大型の破碎設備を備え、大量の木くずを効率的に木質チップへと再資源化。
ここで生産されたチップは、大手製紙メーカーやバイオマス発電所へと供給しています。



白岡リサイクルセンター(埼玉県白岡市下大崎888)
2018年10月より操業を開始した埼玉・北関東エリアを支えるリサイクル拠点。
建設現場や解体現場、物流拠点から発生する木くずや木製パレットを効率的に処理・リサイクルし、地域に根差した資源循環を実現しています。

木くずが資源として
生まれ変わるしくみ



「手紙」は語る

植村 鞆音

人間は表現する動物だというが、

手紙は人間の表現のなかでもっとも深く高貴なものだと思う。

手紙は書きがいい。眼光紙背に徹すれば、書き手の人となりが見えてくる。

第四十五回 本間 克彦

わたしはあと二年で卒寿を迎えるが、いま、生涯でもっとも親しかった友人を扱ぶとすれば、本間克彦は三本の指に入ると思う。あだ名はトンコ。彼と出会ったのは新潟高校で、だったが、彼が若くして死んだので、数えてみるとわずか三十年のつき合いでしかない。

わたしは小心で、勉強も趣味も仕事もすべて普通というレベルの人間だが、「類は友を呼ぶ」の伝で、同レベルの三人の同級生と親しくなり、彼らのお蔭で充実した青年、壮年時代を生きることができた。

わたしが住んでいたのは当時の新潟市の日本海寄り、ほぼ中央だったが、本間は、西寄りの寺尾という町で、家族と暮らしていた。母親は、明るく若くて美人だった。父親は、新潟の名士だったが、直接話し合った記憶はない。

多少離れてはいたがお互いの家を頻繁に往き来した。わが家は母が天折したので友人を招いて夕食を共にする機会は少なかったが、本間の寺尾の家には友人たちとよく集まった。車の普及していない当時はディーゼルの電車に乗って。雪が解けると近くの遊園にはチューリップの花が咲き、夏は西瓜が実を实らせた。遥かに佐渡を望む五十嵐浜でひと泳ぎして帰宅すると、沸かしたての風呂と冷えた西瓜が待っていた。その後、母親手製の夕食も、ご馳走になった。それが、あの頃、われわれの最高のたのしみだった。

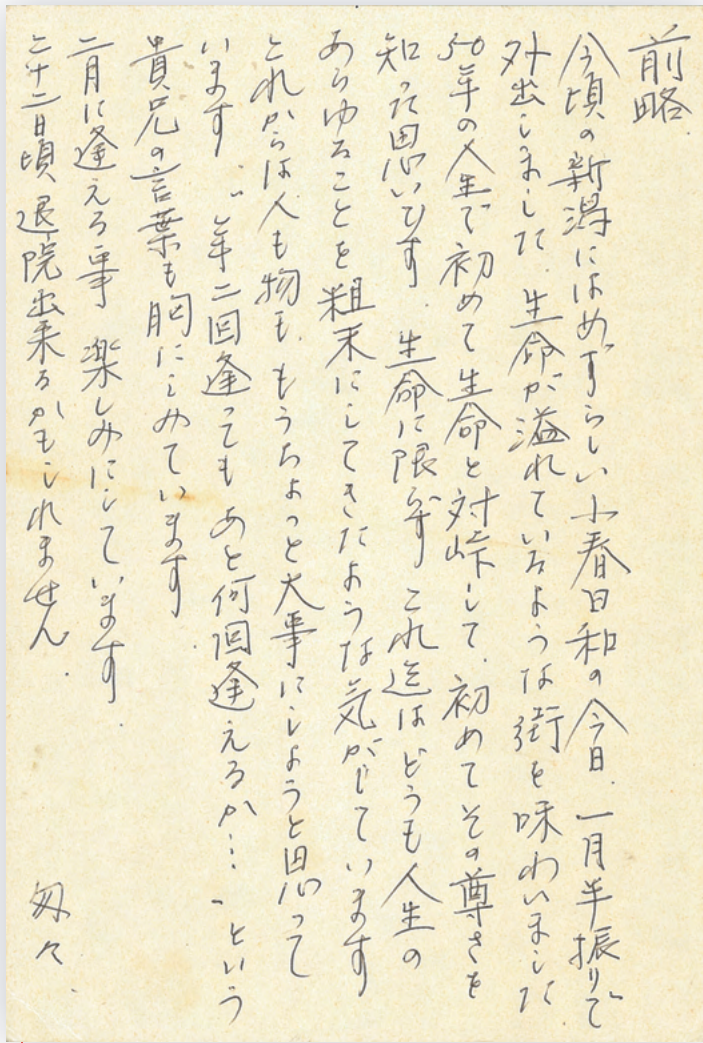
本間ととくに親しくなったのは、二人そろって大学を落第してからだ。入学してからは、学部が違ったので東京で会う機会は逆に減ったが、新潟に帰れば、お互いの家を行ったり来たり

けた。後を追ってわたしも結婚し、二人の男の子をもうけ、こんどは家族ぐるみのつき合いが始まった。長い休暇が来るたびに本間は「遊びにこないか」と誘いの電話をくれた。私はそれを心待ちにするようになっていた。

もっとも、彼の家に泊めてもらっても、仕事熱心な彼は深夜まで家に戻らないことが多く、なかなか二家族で一緒に行動することはできなかったが。

わたしが若い頃よく泳いだ日和山海岸には、親友三組の家族で向かった。小さい子どもたちの波間ではしゃぐ姿は二十年前のわれわれの幼き時代の姿そのものであった。本間と彼の敬愛する大津さん、それに落第四人組の一人高杉くん。サラリーマンになつていつか実現しようといながら果たせないままになっていた念願のゴルフの実現も忘れられない。昭和六十二年夏の八月十日だった。会場は紫雲寺CC。お互いスコアは自慢できるほどのものではなかったが、ただただ楽しかった。遠くで日本海が光って見えた。あれは神が本間とわたしに与えてくれた最後の機会だったにちがいない。

本間は、その年の十月に発病し、十一月に手術を受けた。わたしは、出来る限り都合をつけて彼を見舞った。年末にもつた本間からの葉書が残っている。



たりの日々を繰り返かえすのだった。

人づき合いのいい彼は、わが家の父や妹とも仲がよかった。大雪の降った翌日、いまでも潰れそうなのが家の雪下ろしに駆けてくれた本間。大学に通う頃祖母が死んだが、その時も彼は真っ先に駆けつけてお焼香をしてくれた。線香を持つ指先がふるえていたことをなぜかいま思い出す。

本間のほうが先に卒業し、新潟の放送局に就職した。一年遅れて卒業したわたしは東京の映画会社に就職したが、社会人先輩の彼から象牙の印鑑を就職祝い頂戴した。「これからは印鑑を使う機会がおおくなるから」と、多少照れながら彼はいった。印鑑は、実印として六十年間使わせてもらった。

彼は二度結婚した。最初の奥さんとの出会いは結婚披露の席でだった。東京で就職したわたしはもう年に数度しか帰省する機会がなかったが、新潟に帰れば本間家に立ち寄ることを慣わしとしていた。わたしは、友人たちと新家庭を訪ね、ご馳走になり、たのしい語らいの時をもった。しかし、この結婚はうまくいかなかった。奥さんがわたしを訪ねて上京した。「克彦さんが離婚を考えている。私は離婚したくない。植村さんからそう説得してほしい。もう、克彦さんを説得できるのは植村さんしかない」と彼女はいった。わたしは、その旨を伝えたが、本間の離婚の意志は固かった。しばらくして、本間は職場の同僚だったみゆきさんと再婚し、二人の女の子をもう

「(前略)今頃の新潟にはめずらしい小春日和の今日、一月半振りで外出しました。生命が溢れているような街を味わいました。50年の人生で初めて生命と対峙して、初めてその尊さを知った思いです。生命に限らずこれ迄は、どうも人生のあらゆることを粗末にしてきたような気がしています。これからは人も物ももうちょっと大事にしようと思っています。」

『年(回逢つてもあと何回逢えるか...)』という貴兄の言葉も胸にしみています(後略)』本間が亡くなったのは翌年の九月だが、わたしが彼を最後に見舞ったのは八月末、ソ連に出張する直前だった。彼は見るかげもなく痩せ、手術したあとの喉が痛く、声を出すのも辛そうだった。「このままむぎむぎ死ぬわけにはいかない」と彼がいった。わたしは「そうだな」と応じた。彼の胸の中に、みゆきさんと二人の娘、美希ちゃんと亜希ちゃんのことがあるのは明らかだった。そして言葉を吐いた。「植村、いまいばんの俺の望みがわかるか」二拍おいて言葉を吐いた。「コップ二杯の冷たい水を昔のように飲むことだ」。

わたしは、唾をのむことさえ思うにまかせぬ彼の苦痛を思い、自らの日頃の傲慢と驕りを戒めた。握手をして別れた。本間はしばらくの間握った手を離さなかった。「もういちど会いたい」が、と、彼はいった。わたしは言外に「もう会えないかもしれない」という言葉を聞いていた。



著者略歴

うえむら ともね

植村 鞆音 エッセイスト

小説家・直木三十五の甥、東洋史学者・植村清二の子として愛媛県松山市に生まれる。1962年早稲田大学第一文学部史学科卒業後、東映を経てテレビ東京に勤務。同局常務取締役、(株)テレビ東京制作代表取締役社長等を歴任。2006年受賞『直木三十五伝』(https://www.rsl.waikei.jp/prize01.html)で尾崎秀樹記念・大衆文学研究賞受賞、2007年「歴史の教師植村清二」で日本エッセイスト・クラブ賞受賞。主な著書に『夏の罅』『気骨の人 城山三郎』など。



よしひこ

本間 克彦

ラジオ、テレビプロデューサー
1937-1988

1937年、新潟市生まれ。早稲田大学卒業後、新潟放送(BSN)に就職。ラジオ、テレビ番組の制作、演出に携わる。テレビ、ラジオ両部門において、日本民間放送連盟(民放連)が選定するアワードを多数受賞。本エッセイの著者・植村とは新潟高校で出会い、家族ぐるみの親交が30年続いた。1988年、51歳で早逝。

02 仙台七夕の彩りと紙文化に触れる
展示イベントを開催

KPPグループホールディングスは、グループ会社である鳴海屋紙商事（宮城県仙台市）が制作する仙台七夕飾りを、銀座松竹スクエア（東京都中央区）にて展示します。会場には、仙台七夕まつりの象徴ともいえる全長約6メートルの吹き流しをはじめ、中央区の子どもたちが願いを込めて書いた短冊を飾った笹飾りを展示。来場者も自由に短冊へ願いを書くことができ、日本の伝統文化を身近に体験することができます。

この取り組みは、地域貢献活動の一環として、子どもたちに「書く」「飾る」といった体験を通じて紙の魅力を伝えることを目的としています。展示される七夕飾りは、仙台七夕まつりで実際に使用されるものと同じ紙製の飾りで、東京にいながら仙台の夏の風情を感じられる貴重な機会となります。

また、本社近隣にある京橋築地幼稚園・小学校では、七夕飾りの由来や七つ飾りを紹介する展示を実施。子どもたちが書いた短冊は、会期中に銀座松竹スクエアへ移され、多くの来場者の目を楽しませます。

KPPグループは、紙が持つ文化的価値や可能性を伝える活動を通じて、人と地域、そして未来をつなぐ取り組みをこれからも続けていきます。



鳴海屋紙商事トピックス

仙台七夕関連商品は
楽天オンラインストア
にて販売しています。

KPPグループ公式YouTubeにて会社紹介動画を公開中

仙台七夕展示イベント①
銀座松竹スクエア

どなたでも自由に
ご覧いただけます

仙台七夕飾りとあわせて、C.W.ニコル・アフンの森財団の活動を紹介するパネル展示をはじめ、当社広報誌『TSUNAGU』のバックナンバーの配布やペーパークラフト作品の展示、さらには紙資源の循環をテーマにした展示も展開します。紙を基軸に事業を展開するKPPグループならではの視点から、紙の文化的価値と環境価値の両面をご紹介します。ぜひお気軽にお立ち寄りください。



会期：2026年7月17日(金)～8月7日(金)
会場：銀座松竹スクエア(東京都中央区築地1-13-1)
アクセス：東京メトロ日比谷線／都営地下鉄浅草線「東銀座駅」下車、徒歩2分

仙台七夕展示イベント②
京橋築地幼稚園・小学校

本社近隣地域における教育活動の一環として、仙台七夕飾りに関する展示を実施します。七夕飾りの由来や歴史を紹介するパネルとともに、七つ飾りの実物や短冊を展示し、子どもたちが日本の伝統文化への理解を深める機会を創出します。



会期：2026年6月19日(金)～7月17日(金)
※一般の方は見学できません

私は日常、KPPグループで働く傍ら大学院生でもあるのですが、多くの授業ではリアクションペーパーなどの提出物において、AIによるチャットボットは使用禁止の旨が常に明記されている印象です。一方、それ以外のありとあらゆることはAIに相談し放題というなか、普段考えていることを入力し、肯定してもらうことを繰り返していると、自分の考えは正しいに違いないと思いついてしまうことも少なくありません。このように、たとえ客観的にみて間違っていることを考えていたとしても、その考えを他人に話して意見を貰ったりすることで認知のゆがみは正されますが、AIと話しているとその認知は閉じていく一方ということを実感しています。

同じようなこと(AIは人間に迎合しすぎる傾向があるという点)が最新の研究※でも問題提起されていますが、こういった出来事を通して、日頃、常にある問いを自分に投げかけるようになりました。それは、この考えや思いは「本物か?」ということです。

AIは数秒で答えを明らかにしてくれる素晴らしいツールですが、その答えは自分の頭で導いていないという点では偽物でもあり、生活体験からそれを本物にしていくことが求められるのではないかと、この想いを今回の特集の取材時に下中菜穂さんにお話したところ、「本物」にしているということについて沢山のヒントをいただきました(該当部分はP6)。

本物の体験は顔も知らない未来の人々に続いていき、それは、紙文化が続くことを意味します。

(加藤智香)

※Myra Cheng, et al. "Sycophantic AI decreases prosocial intentions and promotes dependence." Science 391.6792 (2026).

持続可能な社会の実現に向けた、KPPグループのあくなき挑戦をご紹介します

KPP Sustainable Times

限りある資源やエネルギーの循環・再生は、現代社会が向き合うべき最優先課題です。KPPグループは「循環型社会の実現」をミッションに掲げ、事業を通じた持続可能な社会づくりと企業価値の向上に邁進しています。今号では、屋外向け紙製人工芝「ペーパーターフ®」の導入事例と、伝統的な紙文化の魅力を発信する「仙台七夕まつり」の展示イベントをご紹介します。

01 品川区立環境学習交流施設「エコルとごし」に
屋外向けペーパーターフ®を敷設

当社グループの王子ファイバーが開発した紙製人工芝「ペーパーターフ®」が、品川区立環境学習交流施設「エコルとごし」の屋外遊具広場に敷設されました。「ペーパーターフ®」は、アバカ由来の「かみのいと OJO+」をパイル部分に採用した人工芝です。マイクロプラスチックの海洋流失抑制に貢献するとともに、紙素材ならではの低い熱伝導率により、一般的なプラスチック製人工芝と比べて表面温度の上昇を抑える特長を備えています。

今回敷設された屋外向けモデルは、これまでの屋内向け製品で培った環境性能や安全性を継承しながら、耐久性・耐候性をさらに向上。乳幼児向け製品基準「エコテックス®スタンダード100」において、3歳までの乳幼児向け製品と同等の基準である「Annex6クラス1」をクリアする高い安全性に加え、防炎性能も備えるなど、多くの人々が利用する公共施設でも安心して使用できる仕様となっています。

環境配慮と快適性を両立する「ペーパーターフ®」。その活用の際は屋内から屋外へと広がり、持続可能な社会づくりに向けた新たな選択肢として注目を集めています。



エコルとごし
品川区立環境学習交流施設

2022年5月に開館した環境学習交流施設です。年間約25万人が来館し、環境について楽しく学べる場として、多世代に親しまれています。東京都内の公共建築物として初めて「Nearly ZEB」認証を取得するなど高い環境性能を有しており、先進的な施設として全国から注目を集め、多くの視察者が訪れています。

住所：東京都品川区豊町2-1-30(戸越公園内)
開館時間：7:00～21:30 ※展示エリア・キッズスペースは9:00～18:00
入館料：無料 ※区内外を問わず、どなたでも無料で利用可能
休館日：毎月第4月曜日(祝日の場合は開館し、翌平日休) 年末年始(12月29日～1月3日)
URL：https://ecoru-togoshi.jp/

QRコード

「ペーパーターフ®」に関する詳細、施工事例は、王子ファイバー株式会社ホームページでも紹介しています。
https://www.ojifiber.co.jp/ja/paperturf.html



紙のちからで、芝が変わる。
呼吸する芝 ペーパーターフ

コンセプト

「地球を、青く変える。心も変える。」
自然で感じる、地球の力。未来へつなぐ。心も変える。

QRコード

紙の綴

かみのつづり

Vol.

01

Title

祈りを灯し、揺らめきを宿す和紙の佇まい

とうろう
「灯笼」

灯りを包み、人の想いをつなぐ紙の文化

夕暮れが近づくころ、柔らかな光をまとい、静かに輝く灯笼。その姿に、どこか懐かしさや安らぎを感じる人も多いのではないだろうか。祭りや供養の場で目にする機会が多い灯笼ですが、その役割は単に明かりを灯すためだけではありません。紙と光が生み出す美しさを通じて、人々の願いや祈り、地域の文化を未来へと受け継ぐ存在でもあります。

灯笼の歴史は古く、仏教の伝来とともに伝わったとされています。当初は金属や石造りのものが主流でしたが、室町時代以降、木や竹の骨組みに和紙を貼り付けた「灯笼」や「行灯」が登場したことで、明かりは一気に人々の身近なものへと変化しました。ここで重要な役割を果たしたのが「和紙」です。和紙は単に風を防ぐだけでなく、中にある炎の強い光を柔らかく分散させ、空間全体を包み込むような「ぬくもり」へと変換します。障子と同じように、直射日光や鋭い光を心地よい障壁となつて和らげる。この日本独自の「透光の美」は、夜の闇を完全に消し去るのではなく、闇と光が共生する情緒豊かな暮らしを育んできました。また、お盆の「灯笼流し」に代表されるように、灯笼は単なる照明器具として

の役割を超え、死者の魂を弔い、祈りや願いを届ける精神的な媒体でもあります。揺らめく光を包む紙の優しさは、人々の悲しみや願いを受け止める包容力そのものだったと言えます。

近年、灯笼は新たな進化を遂げています。光源はろうそくからLEDへと変わり、安全性や耐久性が向上。和紙だけでなく、屋外のイベントで使用した後にそのまま自然に還る特殊紙や、雨天でも繰り返し使える耐久性・防水性を備えた機能紙を使用した灯笼も登場しています。また、最新のLED技術やIoTと組み合わせることで、人の動きや周囲の音に反応して光り方が変化するインタラクティブな紙灯笼など、紙と光の表現は新たな可能性を広げ続けています。伝統的な姿を守りながらも、現代の技術と結びつくことで、灯笼は新しい価値を生み出しているのです。祭りの賑わいの中でも、静かな祈りの場でも、灯笼は人と人、人と地域、人と未来をつなぐ存在です。一枚の紙が光をまとうことで、空間を、そして人の心を豊かに彩る。灯笼が紡いできた光の歴史は、これからも私たちが未来を優しく照らし続けていくはずで



輸送マイルージとCO2排出を抑え、地球温暖化に配慮したライスインクを使用しています。



針金・糊・熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。



KPPグループホールディングス株式会社
KPP GROUP HOLDINGS CO., LTD.

発行：グループコーポレート・コミュニケーション室
〒104-0044 東京都中央区明石町6番24号
TEL (03) 3542-4166 (代)

<https://www.kpp-gr.com/>

TSUNAGU公式Instagram
ID: kpp.tsunagu

ぜひフォローを
お願いいたします!